

ヴェルナー・ゾンバルトと信用創造理論の系譜 ——「動態的信用理論」の受容をめぐる——

Werner Sombart und die Genealogie der kreditschöpferischen Theorie

——Um die Aufnahme der „dynamischen Kredittheorie“——

博士後期課程 経済学専攻 2003年度入学

奥 山 誠
OKUYAMA, Makoto

【論文要旨】

本稿は、ヴェルナー・ゾンバルトの信用理論がマクラウドを起点とする「動態的信用理論」から受けた影響について検討するものである。信用学説史上はじめて体系的な信用創造理論を構築したマクラウドは、「信用」を「将来収益に対する現在の権利」として把握する視点を確立し、ここに信用が「無」から「創造」される契機を認めたが、こうした彼の視角は、ドイツ語圏ではシュンペーターとL. A. ハーンによって引き継がれた。すなわち、シュンペーターは、「信用」を「将来の給付やこれから生産されるべき財貨についての証明書」とであると規定したうえで、「新しく創造される購買力の可能量」が企業家の革新を通じて創出される「将来の財貨」によって保証されていると主張し、またハーンもマクラウドやシュンペーターと同様の立場を維持しつつ、銀行の積極的な与信業務が将来的な生産力の向上をもたらす最も重要な要因であることを強調した。

このような同時代の「動態的信用理論」から多くを学んだゾンバルトは、「信用」を「貨幣所有のない購買力」あるいは「将来の反対給付の約束に対して購買力を供与すること」として定義し、信用創造の行われる根拠を企業家の革新によって実現される「余剰生産」のうちに見出す。要するに、企業家の革新を経済発展の「原動力」と捉える点で、ゾンバルトはシュンペーターと見解を共有しており、彼が「動態的信用理論」を受容した最大の理由もここに求められるのである。

【キーワード】 ゾンバルト、信用創造理論、動態的信用理論、生産信用、指図信用

I. はじめに

ヴェルナー・ゾンバルトの主著『近代資本主義』（第2版）の第3巻は、その副題が示すように、「盛期資本主義時代」の経済的特質を解明することを目的としている。ゾンバルトは、本書で「盛期資本主義経済」の生成・発展に寄与する主要なファクターとして特に「資本主義的企業家」、「国家」および「近代的技術」の3つに注目し、それらを順次分析しているが、それに加えて彼はさらに「資本調達」の問題との関連から「信用」が経済発展に対して果たす役割にも大きな関心を寄せている。とりわけゾンバルトは、「信用」を媒介として「企業家が資本所有から分離していく傾向」が促進され、これによって自己資本の制約を受けることのない「純粋な企業家類型」が創出されることになったと認識しており¹、この意味で彼にとって「信用」は、まさしく「近代的技術」とならんで19世紀中葉以降の「盛期資本主義経済」の興隆・展開を実現させるための「最も重要な手段」とまで見なされている²。したがって、ゾンバルトの信用理論に立ち入った考察を行うことは、従来その議論の核心が「動学」の領域にあると評されてきた³彼の経済学体系の内容をより具体的に把握するうえで不可欠の作業であるといえよう。

上記の問題意識から本稿では、経済思想史研究におけるゾンバルト・ルネサンスを主導してきたアペルやレンガーが研究対象として設定しておらず、またバックハウス編纂のゾンバルト研究論集⁴のなかでさえ主要テーマの扱いを受けていないゾンバルトの信用観を、主として彼以前の信用理論との継承関係を視野に収めながら検討する。課題の具体化にあたっては、まず『近代資本主義』第3巻においてゾンバルトが同時代の信用理論の動向を評した興味深い次の言説に着目したい。

古くから信用の本質については、2つの根本的に異なる見解が並存してきた。われわれは、その対立をイギリス的とスコットランド的、あるいは静態的と動態的と呼ぶことができる。この2つの傾向が、古典的に表現されている著作としては、K. クニース『貨幣と信用』第2巻『信用』1876-79年（Karl Knies, *Geld und Kredit*, Band II, *Der Kredit* 1876-79）とH. D. マクラウド『信用の理論』全2巻 1889年（Henry Dunning Macleod, *The Theory of Credit*, 2 Vol. 1889）を挙げることができる。／つい最近まで、信用の本質についての静態的見解が優勢であった。むしろ絶対的支配を得ていたといっても差し支えない。この問題にかんする最も大部なモノグラフであるJ. v. コモルツィンスキーの著作『信用の国民経済的理論』1903年（Jo-

¹ Sombart (1927, 14 : 訳37) 圏点は原文ゲシュェルト、ゴシックないしイタリック、あるいは引用符による強調を示す。以下同様。

² Hinze (1929, 485-486)

³ Schumpeter (1908, 18 : 訳66)

⁴ Appel (1992); Lenger (1994); Backhaus (1996; 2000)

hann von Komorzynski, *Die nationalökonomische Lehre von Kredit*, 1903) の375ページには、率直にこう書かれている。「信用が資本創造力をもつというかつての誤謬は、今日では克服されたものとみることができる」と。／それ以来、状況は一変した。今日では、われわれは動態的信用理論が勝利の歩みを始めているとはっきりいうことができる。現在、動態的信用理論はドイツの文献のなかでは、J. シュンペーター『経済発展の理論』1912年 (Josef Schumpeter, *Theorie der wirtschaftlichen Entwicklung*, 1912) と L. A. ハーン『銀行信用の〔国民経済的〕理論』1920年 (Ludwig Albert Hahn, [*Volkswirtschaftliche*] *Theorie des Bankkredits*, 1920) によって代表されている。この理論はまた諸外国、ことにアメリカおよびフランスの文献のうちにも多数の支持者を有している。……／以下の叙述において示される見解もまた、原則として動態的信用理論の正当性を認めている。私の努力したことは、2つの見解を合わせて1つの総合へと達することであったが、……しかし動態的理論それ自体をいっそうよく基礎づけ、そのなかの誤謬を取り去ることにあった⁵。

上記の引用文から明らかなように、ゾンバルトは、マクラウドによって提唱され、『近代資本主義』第3巻刊行当時 (1927年) にあってはシュンペーターと L. A. ハーンによって代表されていた「動態的信用理論」こそが「盛期資本主義経済」に相応しい信用理論であると見なしており、かかる理論の「正当性」をいっそうよく基礎づけることに自らの研究課題を定めている。

ところで、ゾンバルトがここでいう「動態的信用理論」とは、その起点にマクラウドの名前が挙げられていることからわかるように、具体的には「信用創造理論」のことを指すと考えられるが、ではゾンバルトはその理論のいかなる点に「正当性」を見出し、またそれを実際どのように受容したのであろうか。これらの問いを考察するために本稿では、まずマクラウドからシュンペーターを経てハーンへと至る「動態的信用理論」(＝「信用創造理論」)の系譜を概観する。そのうえでゾンバルトの信用理論においてそれらの理論的特質がこういった形で再現されているのかを彼に即して内在的に明らかにしていきたい。

Ⅱ. 近代的信用理論の生成：H. D. マクラウドの信用創造理論

先行研究が明らかにしたように⁶、信用学説史上はじめて体系的な信用創造理論を構築したのがスコットランド出身の法学者 H. D. マクラウド (Henry Dunning Macleod, 1821-1902) であった。マクラウドは、法貨としての貨幣の成立を前提としてその延長上に信用制度が展開されるという19世紀前半までの支配的信用理論とは正反対に、信用こそが論理的にも歴史的にも貨幣に先行

⁵ Sombart (1927, 148-149 : 訳248-249) 引用文中の〔 〕は筆者による補足を示す。以下同様。なお、／はテキストにおける改行箇所を表している。

⁶ Wagner (1937, 148) ; 麓 (1953, 180; 1956, 212) ; 三上 (1980, 558)

する本源的存在であるとする独自の信用観を提唱しており、その意味で、彼は、研究史上、近代的信用理論生成の先駆けとなった人物として位置づけられている⁷。そこで本節では、まず彼の信用理論研究の集大成ともいふべき大著『信用の理論』⁸に拠りながら、その信用概念の基本的な内容を検討していくことにしたい。

マクラウドは、本書の冒頭、経済学を「交換の科学 Science of Exchanges」であると規定したうえで、「交換可能性 Exchangeability」にこそ富の本質があると指摘している⁹。彼によれば、およそ貨幣を媒介として交換され売買されうる可能性をもつものはすべて富である。その際、マクラウドはこうした交換可能性を有する富を、1.「有形物 Material Things」、2. 労働力に代表される「人的能力 Personal Qualities」、3.「抽象的権利 Abstract Rights」という3つの種類に区分している¹⁰。ここで「抽象的権利」とは、公債、銀行券、小切手、為替手形、株式などの請求権に加えて、事業の営業権、著作権、特許権なども含めた信用取引上の権利のことを意味している。マクラウド自ら『信用の理論』（第2版）で書き加えているように、アダム・スミスから J.-B. セー、J. S. ミルに至る古典派経済学者たちは、有形物や人的能力ないし労働を「市場で売買されうる商品 marketable commodity」であるとはっきりと認識していたものの、しかしながら彼らは「抽象的権利」を商取引の対象として捉えることまではできなかった¹¹。二階堂氏がいみじくも指摘しているように¹²、マクラウドの信用理論を古典学派のそれと区別する決定的なメルクマールとは、まさにこの「抽象的権利」が高度に発展した経済社会における信用取引の必要不可欠なファクターであることを明確に主張した点にあったのである。

さて、経済学における富の本質を「交換可能な権利 Exchangeable Right」のうちに認めたマクラウドは、次に「所有権 Property」にかんする精緻な分析を展開している。すなわち、彼は所有権を先に列挙した3種類の富にほぼ対応させる形で、1.「有体または有形所有権 Corporeal or Material Property」、2.「無形所有権 Immaterial Property」、3.「無体所有権 Incorporeal Property」

⁷ Schumpeter (1954, 1116 : 訳, 3, 2348) ; 二階堂 (1993, 161)

⁸ マクラウドのこの著作は、初版 (Macleod 1889-1891, 1ed., I-II) と第2版 (Macleod 1893-1897 2ed., I-II) が公刊されている。筆者の確認した限りでは、初版と第2版の間には、新たに書き下ろされた章がたしかに一部存在するものの (たとえば「グレシャムの法則」についての検討を行っている第5章「貨幣鑄造の理論 The Theory of the Coinage」)、章・節の構成および叙述の内容について基本的にはそれほど大きな変更は加えられてはいないように思われる。しかし、そうはいつてもマクラウド自身の加筆と修正により、第2版の文章の方が初版よりも精密に整理され、かつ彼の真意をより正確に表していると思われる箇所があることも事実である。それゆえ、本稿では主として初版のテキストに依拠しながらも、初版との比較検討をしたうえでマクラウドの意図がより明快に文章として表現されていると筆者が判断した場合には第2版のテキストから引用を行うことにする。なお、二階堂 (1993, 160) によれば、マクラウドが『信用の理論』で提示した近代的信用観の骨子は、1855-56年に出版された彼の著作『銀行業の理論と実践』(*Theory and Practice of Banking*, 1ed., 1855-56) のなかにもすでに見出すことができるという。

⁹ Macleod (1889, 1ed., I, 1-5)

¹⁰ Macleod (1889, 1ed., I, 29)

¹¹ Macleod (1893, 2ed., I, 42-43)

¹² 二階堂 (1993, 162)

という3つの形態に区別している¹³。「有体または有形所有権」とは、特定の有体物 corpus、動産・不動産を含めた特定の物 matter に対する権利のことであり、他方で「無形所有権」とは、人間の精神的知的能力、とりわけ彼自身の労働・サービス、さらには労働によってもたらされた収益までを含めた無形資産を支配する権利のことを意味している。これに対して、マクラウドは「無体所有権」を「将来、ある人が他のある人に対して一定の額の貨幣を請求する権利」として定義している。ただし、ここで注意しておかなければならないのは、マクラウドのいう「無体所有権」とは、「一定の額の貨幣」という特定の有体物を支配するための権利ではなく、債権者が債務者に対して貸与していた貨幣の返済など一定の行動を請求するという「行為についての権利 Right of Action」として捉えられているということである。この「無体所有権」=「行為についての権利」という考え方こそは、マクラウドの信用理論の核心を占めている決定的に重要な観念であった。彼は次のように述べる。

もし商人がその名のとおりの良い信用 Credit を享受しているならば、彼は市場に出向き、貨幣ではなく、将来貨幣を支払うという約束によって財を買う。すなわち、彼は行為についての権利を自らに対して創造するのである。その財は、まさに貨幣で支払ったかのように彼の財産になる。それは売買あるいは交換である。行為についての権利とは、財に対して支払う価格である。それは信用……と名づけられる。なぜならそれはある一定の額の貨幣に対する権利ではなくて、その商人に対して将来ある額の貨幣を請求するという行為についての権利にすぎないからである¹⁴。

このように、マクラウドにとって「信用」とは、貸与された一定額の貨幣を支配する権利ではなく、将来において一定額の貨幣の支払いを請求するという「行為についての権利」に他ならなかった。言い換えれば、彼は「信用」を「将来収益に対する現在の権利」として把握しており、さらに「信用」の真の機能を「将来収益の現在価値を交易のなかに導入すること」のうちに見出そうとしたのである¹⁵。「信用」にかんするマクラウドのこの論理からすると、たとえばある企業の株式の総額は、単に当該企業における現存の所有権の価値を示しているだけではなく、その企業の「将来収益を含めたうえでの現在の価値」を表していることになる。マクラウドは、株式や公債、為替手形などの請求権のほか、事業の営業権、著作権、特許権など「抽象的権利」全般に対して支払われる貨幣総額が、いずれも「将来収益の現在価値」を明示したものであることに注意を喚起している¹⁶。

¹³ Macleod (1889, 1ed., I, 45-46)

¹⁴ Macleod (1893, 2ed., I, 15)

¹⁵ Macleod (1889, 1ed., I, 80)

¹⁶ Macleod (1889, 1ed., I, 80)

ともあれ、マクラウドは、このように「信用」に対して未来に対する請求権としての性格を与えることによって（＝「信用」に対する時間概念の導入）、古典学派の経済学者たちには全く欠落していた信用観、すなわち信用が「無」から「創造」されるという独特の新しい観念を導き出すことができたのであるが¹⁷、彼によれば、かかる信用創造を本質的業務とみなし、これを積極的に遂行する唯一の機関が銀行であった。彼は次のようにいう。

われわれは、銀行および銀行業者の本質は要求払いの信用を創造し、発行することにあると考えている。そして、この信用は流通し、かつ貨幣のあらゆる目的を果たすように意図されている。それゆえ銀行とは、貨幣を貸借する店舗ではなくて、信用の製造所 *Manufactory of Credit* なのである¹⁸。

見られるように、マクラウドは銀行に対して単に「貨幣を貸借する店舗」としての役割しか認めようとしないうる従来の「媒介的銀行理論」¹⁹を厳しく批判しつつ、その本質的な機能が信用創造にあることを明確に指摘している。すなわち「銀行とは、要求払いの信用・債務または行為についての権利を創造することによって、将来に支払われる貨幣・信用・債務または行為についての権利を購入する取引業者」²⁰に他ならず、それゆえ「信用の販売店舗 *a shop for the sale of credit*」²¹として理解されるべきものである。マクラウドの以下の主張は、こうした彼の銀行およびその機能に対する基本的な立場を鮮明に表すものといえるであろう。

実をいえば、銀行は貨幣の取引業者ではない。銀行は貨幣を貸し付けたりはしない。その唯一の機能は、信用を創造し、発行すること、すなわち他の債務を創造し、発行することによって貨幣と債務を購入することにある。……銀行はけっして貸したいと思う人と借りたいと思う人との間の媒介業者として機能することはない。銀行はもっぱら自らの信用をもって、ある者からは貨幣を、他の者からは行為についての権利を購入するのである²²。

ところで、マクラウドが「信用」を「将来収益に対する現在の権利ないし現在の価値」であると繰り返し強調していることからわかるように²³、彼にあっては「信用」とは、将来的な利潤獲得

¹⁷ 二階堂（1993, 168）は、マクラウドのこうした「信用への時間概念の導入」という発想が、のちにオーストリア学派によって本格的に展開された「資本利子」論の先鞭をつけることにもなったと指摘している。

¹⁸ Macleod (1890, 1ed., II-1, 364)

¹⁹ 麓（1953, 181; 1956, 217）は、「媒介的銀行理論」を古典学派に特有の信用理論と見なしたうえで、これを「近代的銀行理論」（＝「信用創造理論」）に対置している。

²⁰ Macleod (1894, 2ed., II-1, 585)

²¹ Macleod (1890, 1ed., II-1, 374)

²² Macleod (1890, 1ed., II-1, 375)

²³ Macleod (1890, 1ed., II-1, 390; 397; 418)

を最高の目標として創造されるものであり、したがってその機能的特徴はいうまでもなく「資本」と同一のものとして捉えられている。彼は次のようにいう。

利潤をもたらすものはすべて資本である。それゆえ、銀行信用が貨幣と同様の利潤をもたらす限り、信用が貨幣と同様に銀行にとって資本であるということは極めて明白なことである²⁴。

マクラウドは、このように「信用」と「貨幣」をともに「資本」(=「購買力 Purchasing Power」)であると規定する一方で、同じ「資本」としての機能を果たしながらも両者の間には決定的な相違点があることも看過することはなかった。すなわち、「貨幣」が「過去に実現された収益からなる資本」であるのに対して、「信用」は「将来期待される収益からなる資本」として把握されなければならないのである²⁵。そして彼の認識によれば、資本が過去に実現された収益にのみ限定されている「貨幣」よりも、将来的な収益を見込んだうえで、保有する現金の何倍もの貨幣を資本として創造することのできる「信用」の方が、近代的な産業の発展に対してははるかに重要な貢献を果たしたのであった。こうして、マクラウドは改めて古典学派の信用観、わけても信用が現存する資本の単なる移転に過ぎず、けっして新しい資本を創造するものではありえないとする J. S. ミルの見解に対して真っ向から批判を加えつつ²⁶、新規事業の創設や新商品の開発などその初期段階で莫大な資本を必要とする新しい経済活動の展開にとっては、「信用」にもとづく資本の増加・拡充が何よりも必要かつ有効な措置であるとみなしたのである。たとえば彼は次のように論じている。

信用とは、過去のいかなる商取引にも依存するものではないし、また現存する商品をただ譲渡するためだけに用いられるものでもない。それは、新しい商品を作るという明確な目的のために創造されるのである。もし信用創造が行われないとするならば、新商品は全く存在しなくなるか、あるいはいずれにせよ、まとまった貨幣が蓄積されるまで非常に長い期間にわたって〔その開発は〕引き延ばしにされることになるであろう²⁷。

上記引用文からも明らかなように、マクラウドは「信用」を既存の生産システムを再編し、動態的な経済発展を志向していくために欠かすことのできない決定的に重要なファクターであると捉え

²⁴ Macleod (1890, 1ed., II-1, 376)

²⁵ Macleod (1890, 1ed., II-1, 396) ちなみにマクラウドは将来的な収益を見込んだうえで「信用」が生み出す資本のことを「生産資本 Productive Capital」という用語で表現している (Macleod 1890, 1ed., II-1, 397)。

²⁶ マクラウドによる J. S. ミルへの批判については、特に Macleod (1890, 1ed., II-1, 418-422) を参照。マクラウドは、銀行の本質的機能である「信用創造」を「まやかしの力 magical power」と見なし、かくて「信用」を「生産力 Productive Power」として把握する視点を完全に失っているミルの信用観に対し、厳しい非難を浴びせている。

²⁷ Macleod (1890, 1ed., II-1, 399)

ていたのであった。それでは、古典学派とは一線を画するこうしたマクラウドの近代的信用観は、彼以降の経済学者によっていかに継承され、さらには発展させられていったのであろうか。次節では、シュンペーターと L. A. ハーンの信用理論を分析することを通じて、この過程を考察していくことにしたい。

Ⅲ. 「動態的信用理論」の展開：シュンペーターと L. A. ハーンの信用創造理論

研究史が教えるように²⁸、シュンペーターは、資本主義経済の特質を非連続的かつ飛躍的な経済発展を志向する動態的過程のうちに見出し、かかる発展の原動力として体系内部における指導的な「企業家」の革新的経済活動（＝生産手段の「新結合」の遂行）を重視している²⁹。シュンペーターによれば、「経済発展とは、本質的に現存の労働用役および土地用役を他に転用すること」を意味しており、この「根本観念」から彼は、「新結合の遂行は労働用役および土地用役を慣行の用途から奪い取ることによって行われる」という独特の命題を確立する³⁰。すなわち、企業家は「生産手段市場において循環場裡の生産者よりもいっそう高い価格を提供し、自分の必要とする数量の生産手段を彼らの手から奪い取る」³¹ことによって、「新結合」を実現させようとするのである。

シュンペーターの認識によれば、この新結合に必要な「購買力」（＝「追加的信用 zusätzlicher Kredit」）を企業家に対して供給する唯一の金融源泉が「銀行による貨幣創造」であった³²。彼は、「銀行家の機能」について次のように述べている。

……銀行家は、常に購買力 Kaufkraft という商品の仲介商人であるのではなく、またこれを第一義とするものでもなく、何よりもこの商品の生産者である。しかも現在ではすべての積立金や貯蓄はことごとく銀行家のもとに流れ込み、既存の購買力であれ新規に創造される購買力であれ、自由な購買力の全供給はことごとく彼のもとに集中しているのが常であるから、彼はいわば私的資本家たちにとって代わり、彼らの権利を剥奪するのであって、今や彼自身が唯一の資本家となる。彼は新結合を遂行しようとするものと生産手段の所有者との間に立つ。……彼は新結合の遂行を可能にし、いわば国民経済の名において新結合を遂行する全権能を与えるのである³³。

²⁸ 大野（1971）；金指（1987；1996）；伊東・根井（1993）；根井（2001）

²⁹ Schumpeter（1910, 275-285；1912, 147-164；1926, 92-102：訳169-187；1928, 482-483）

³⁰ Schumpeter（1912, 199；1926, 140：訳251）

³¹ Schumpeter（1926, 107：訳192）

³² シュンペーターの貨幣・信用理論については、同時代の代表的な業績である Ellis（1934）、Wagner（1937）をはじめとして、わが国でも木村（1933）、三輪（1949；1951；1952；1963）、麓（1953）など早くからすぐれた研究が提出されている。最近の成果としては、野田（2000）あるいは石川・飯田（2003）が注目される。

³³ Schumpeter（1926, 110：訳197-198）

それでは、この「唯一の資本家」としての銀行は、いかなる担保にもとづいて企業家に対して信用の供与を行うのであろうか。この問題について、シュンペーターは、さしあたり次の二つの場合を区別する必要があると述べている³⁴。すなわち第一に、「企業家が何らかの財産をもっていて、これを銀行に担保として供給しうる場合」と、第二に、「企業家が貸与された購買力によってえた財貨を担保にする場合」である。第一の場合には、企業家の信用獲得は、実際きわめて容易に行われるであろうが、しかしこれは純粹な意味での事の本質を表すものではない。なぜなら、「企業家機能は、原理上、財産所有に結びついてはいない」からである。他方、第二の場合には、信用の供与が先行し、少なくとも原理的には、またたとえ短時間とはいえ、何の担保も存在しないことになる。つまり、この場合には「最初は何らの新しい財貨も対応しない購買力が創造される」のである。シュンペーターは、このような「購買力の時間的譲渡」を可能にする信用のことを「将来の給付やこれから生産されるべき財貨についての証明書」³⁵であると規定したうえで、「新しく創造される購買力の可能量」は「現存の財貨」によってではなく、「将来の財貨」によって保証され、かつ制約されていると主張している³⁶。かくして、企業家の革新を通じて創出される将来の財貨に依存する信用の総額は、信用が過去の給付や既存の財貨によって保証されているにすぎない場合に比べてはるかに大きなものとなる。「信用という建造物は現存の貨幣基礎をこえるばかりでなく、現存の財貨的基礎をもこえる」³⁷ことになるのである。

以上の考察から明らかなように、シュンペーターにあっては、企業家の革新が「経済発展」のための独立変数としてまず前提されており、信用創造による貨幣供給はその革新活動に依存する従属変数として捉えられている³⁸。要するに、シュンペーターにおける「信用」とは、「新結合」を遂行する企業家に対して、新しい、追加的な「購買力」を供給するための手段に他ならないのである。かくて、彼は「信用」を次のように定義している。

信用とは、本質的には企業家に譲渡する目的でなされる購買力の創造であって、彼に対して単に既存の購買力——すなわち、既存の生産物にかんする証明書——を譲渡することではない。購買力の創造は、原則として、封鎖的でない経済 *nichtgeschlossene Wirtschaft* [= 資本主義経済] において経済発展が遂行される方法の特徴づけるものである。信用は、企業家が財貨に対する正常な請求権を獲得する以前に、彼らに対して経済的な財貨の流れに対する門戸を開くのである。……信用供与は、経済を企業家の目的に服従させる命令、彼が必要とする財貨に対

³⁴ Schumpeter (1912, 206; 1926, 146-147 : 訳262)

³⁵ Schumpeter (1912, 207; 1926, 147 : 訳263)

³⁶ Schumpeter (1926, 165 Anm. 18 : 訳290) なお、『経済発展の理論』第2版で加筆されたシュンペーターのこの注記は、ハーソンの信用理論の構成に対してコメントされたものであるが、いうまでもなくシュンペーター自身の信用観の特徴にも符合するものである。

³⁷ Schumpeter (1912, 206; 1926, 147 : 訳263)

³⁸ 塩野谷 (1995, 212) ; 野田 (2000, 15)

する指図、彼に対する生産力の委託、という働きをする。このようにして初めて、経済発展が遂行され、静態 *statischer Zustand* の域を脱するのである。そして、このような機能こそが近代信用機構の礎石をなすのである³⁹。

上記の引用文に見られる「購買力」を、われわれは「資本」と読み替えることもできるであろう。すなわち、シュンペーターによれば、「資本とは、企業家が彼の必要とする具体的財貨を自分の支配下におくことができるようにする梃子に他ならず、また新しい目的のために財貨を意のままに用いる手段、あるいは生産に新しい方向を指令する手段に他ならない」⁴⁰のであり、「資本」とはまさしく「企業家の自由に委ねられる基金の総額」、言い換えれば「生産手段を静態的軌道 *statische Bahnen* から引き抜く力の大きさ」を意味していた⁴¹。

このように、「購買力」を「資本」と同一視するシュンペーターの見解は、前節で検討したマクラウドの議論に共通するものといえるが、しかしながらシュンペーター自身は、彼の資本概念に対するマクラウドの影響を明確に否定している⁴²。とはいえ、「信用」が無から創造される誘因を革新の導入によってもたらされる「将来的な財貨」のうちに見出そうとするシュンペーターの見解には、「信用」の本質を「将来収益に対する現在の権利ないし現在の価値」として把握したマクラウドの考察からの影響がはっきりと窺われるのであり、そうした意味でシュンペーターの議論は、マクラウドを起点とする動態的信用理論の系譜に位置づけられるべきものと考えられる。

さて、以上に見てきたような、マクラウド、シュンペーターに代表される近代的信用観を継承しつつ、ドイツにおける信用創造理論のさらなる普及・展開のために重要な役割を果たしたのが「フランクフルトの銀行家で通貨理論家」としても令名を馳せた L. A. ハーン (Ludwig Albert Hahn, 1889-1968) であった⁴³。主著『銀行信用の国民経済的理論』で、全取引に占める現金取引の比率

³⁹ Schumpeter (1912, 214; 1926, 153 : 訳273) なお、引用文における「静態」は、第2版では「単なる循環 *bloßer Kreislauf*」と言い換えられている。

⁴⁰ Schumpeter (1912, 226; 1926, 165 : 訳291)

⁴¹ Schumpeter (1912, 236; 1926, 174 : 訳304) なお、引用文における「静態的軌道」は、第2版では「従来の軌道 *bisherige Bahnen*」と言い換えられている。

⁴² シュンペーターは次のように述べている。

ホーレー (F. B. Hawley) もわれわれとまったく同じ地盤に立っている。彼はわれわれとまったく同じく資本の本質を購買力という要因に認め、われわれとまったく同じく資本を企業家と生産手段との間に置いている。しかし何よりも広く知られているマクラウド (MacLeod) の著作を挙げるべきである。私がこの学者をこれまで挙げなかったのを読者が驚くのは当然であろう。……私はこの誤解された人に喜んで正当の地位を与えるが、急いで強調したいのは、私がまったく独立に、まったく異なる道を経て、まったく異なる目的のために、彼と同じく資本は一定の意味において購買力であるという結論に達したことである。……しかし、彼が購買力創造の事実こそわれわれの経済生活の組織の本質的要素であると認識したことは、たとえ彼がこの認識によってそれ以上多くのことを達成しなかったとしても、マクラウドの功績として常に認められなければならないであろう。この事実は、今日ますます多くの注目を惹きつつある。(Schumpeter 1912, 254-255; 1926, 188-189 : 訳330)

が通減傾向にあることに注目したハーンは、現代を「現金節約経済 bargeldsparende Wirtschaft」と命名し、さらにその発展の極限として「無現金経済 bargeldlose Wirtschaft」を想定する⁴⁴。「無現金経済」では、企業家の購買力は銀行の与信業務によって創造され、生産手段または財貨購入に際しての彼らの支払いは、銀行の貸方残高 Guthaben の譲渡を通じて行われる。つまり、ここでは「有体支払手段」としての現金ではなく、「信用支払手段」、わけても小切手または振替口座 Girokonten を介してあらゆる決済が行われることになるのである。

このように、「無現金経済」を想定するハーンにあっては、銀行信用の源泉は、いうまでもなく、公衆によって委託された預金にのみ限定されてはいない。彼は、すべての与信業務は先行する受信業務に依存するというマクラウド以前の古典学派的な銀行理論に真っ向から異を唱えつつ、銀行の与信業務は受信業務に絶えず先行し、その預金形成は、信用供与ののちに初めて生ずる、という「動態的信用理論」に特有の立場を堅持するのである。ハーンは次のようにいう。

銀行の受動的業務を最初に可能にし、これを呼び起こすためには、銀行の受動的業務、特に預金業務が先行するのではなく、一般的にもまた個々の場合においても銀行の能動的業務が先行されなければならない。銀行の受動的業務は、それに先立つ信用供与の反映に他ならないのである⁴⁵。

こうして、ハーンは、マクラウドやシュンペーターと同様、能動的な与信業務とその帰結としての購買力の創造に銀行の本質的機能を認めたうえで⁴⁶、「信用の供与がなければいかなる資本財も生産され得ないし、生産手段の形成という意味でのいかなる資本形成も行われ得ない」⁴⁷と指摘する。要するに、ハーンは「信用の拡大が生産増加的な作用を及ぼす」⁴⁸こと（＝「信用の生産性」）

⁴³ ハーンの信用理論を分析したモノグラフとしては、難波田（1933）、Ellis（1934）、Wagner（1937）、新庄（1937）、中谷（1938）、麓（1953）などがあるが、管見の限り、ハーンにかんしては近年まったくといってよいほど研究が進められておらず、わずかにハーンとシュンペーターとの関連について指摘した八木（1988, 182-183）あるいはハーンのレーデラーに対する影響について論及した雨宮（2005, 41-42）が確認されるにすぎない。ただし、同時代にあっては事情はまったく異なる。特に本国ドイツでは「貨幣と信用にかんする著作でハーンの理論に立ち入った分析を行わないものはほとんどなく」、その研究書の数には「ハーン文献 Hahnliteratur」と呼ばれるほどに膨大であり、その理論が及ぼした同時代知識人に対する影響は、賛否両論含めて絶大なものがあった（Haberler, 1927, 803）。ハーンの信用理論の梗概については、Hahn（1923）も参照。また、その「理論的志向をもつ実務家」としての生涯を知るには、晩年に公刊された回顧録（Hahn 1963）が有益である。なお、ハーバラーの指摘する「ハーン文献」については、ハーン自らが『銀行信用の国民経済的理論』第3版の「序文」において、その主要な著作を列挙している（Hahn 1930, X IV. Anm. 2. : 訳16-20）。

⁴⁴ Hahn（1920, 24, 71; 1930, 22, 63 : 訳65, 135）；大北（1943, 6-7）；三上（1980, 558）

⁴⁵ Hahn（1920, 29）

⁴⁶ Hahn（1920, 120）

⁴⁷ Hahn（1920, 121）

⁴⁸ Hahn（1930, 120 : 訳227）

を力説するのであるが、彼の認識によれば、ここには一つのディレンマが存在していた。すなわち、「一方において、生産のみが財貨を造りだし得るのであるが、信用の供与それ自体は生産でない」ということは、理論上争いがたい事実である。しかしながら「他方において、信用の資本創造力は実際にはこれまた否定し得ない」のである⁴⁹。

では、こうしたディレンマはいかにして解決されるのであろうか。ハーンは次のようにいう。

国民経済的意味における資本、すなわち生産設備の現在高が、一国における生産の増大を通じてのみ増加され得るという立場に立つ限り、このディレンマから逃れる道を見つけることはできない。このような立場は誤りである。資本形成は財貨生産の問題ではなくて、分配すなわち財貨分配の問題である。しかも時間的 intertemporal ならびに人的関係 interpersonal における財貨の分配の問題なのである⁵⁰。

このように、ハーンは「資本形成」の問題を分配関係の変化との関連において捉えようとし、信用創造による需要の変化が、財貨の分配を時間的ならびに人的関係において変化させることによって、「生産の増加」したがって「資本の増加」を促進させると主張する。この点にかんしてハーンの議論に依拠しつつさらに具体的な説明を加えるならば、およそ次のようになるだろう⁵¹。すなわち、信用の供与によって購買力を獲得した企業家は、資本主義的生産方法の典型である「迂回生産」を開始する。周知のように、この迂回生産は、社会的生産物 Sozialprodukt の消費を一定期間延期・制限することによって、当該生産物の将来的な数量を増加させるものである。つまり社会的生産物の消費を一定の期間延期・制限するということは、「時間的關係における財貨の分配」を変化させることに他ならず、これが結果として資本増加をもたらす原因となるのである。他方で、この迂回生産はまた各人間の財貨分配にも変化を生じさせる。たとえば、信用によって購買力を得た企業家が石炭を生産的に消費しようと目論む場合には、これまで石炭を家庭用燃料として使用していた一般の消費者たちは、彼らの貨幣所得が上昇しない限り、需要の増加による石炭価格の騰貴のためにその消費を強制的に制限されることになるであろう。こうした「人間的關係における財貨の分配」の変化が、将来的な資本増加を招来させるための必要不可欠な前提であることは疑い得ない。

以上の簡潔な整理からもわかるように、ハーンにあっては、信用によって企業家に付与された購買力は、「財貨を生産的使用のために転換させ、かつ転換させたままにしておくための手段」⁵²として見なされているのであるが、ここでさらに注目すべきことは、彼がこの購買力を「資本」と同一

⁴⁹ Hahn (1930, 130 : 訳242)

⁵⁰ Hahn (1930, 130 : 訳242) ただし、Hahn (1920, 137) でも信用の拡大によって生み出された「分配の変化」が国民経済における「生産の上昇」を惹起するという指摘はすでになされている。

⁵¹ Hahn (1930, 130-131 : 訳243-244) なお、難波田 (1933, 331-332)、中谷 (1938, 154-155)、麓 (1953, 203-204) による分析も参照。

⁵² Hahn (1930, 139 : 訳257)

の概念として捉えているということである。ハーンは「資本」を次のように定義している。

資本とは、財貨およびサービスを強制的に迂回生産に入らしめ、これらを一定期間そこに留めておく抽象的な力 *abstrakte Macht* に等しい。この〔抽象的な〕力は、信用の方法で供与された購買力によって具現化されており、その引渡しは原則として銀行の貸方残高の譲渡の形式で行われる⁵³。

上記の引用文からも明らかなように、ハーンにおける資本概念は、「資本財」としての財貨的性質からは完全に切り離されており、それは財貨分配を実現させるための「抽象的な力」（＝「購買力」）として理解されている。こうしたハーンの資本観は、彼自らも認めるように、まぎれもなくシュンペーターの「資本の購買力理論 *Kaufkrafttheorie des Kapitals*」の影響を受けつつ形成されたものに他ならない⁵⁴。すなわち、シュンペーターと同様、ハーンもまた信用創造による企業家への資本＝購買力の供与が経済発展のための最も重要なファクターであることを確信していたのである。

では、マクラウドを起点とし、シュンペーター、ハーンに継承された「動態的信用理論」は、ゾンバルトにおいていかに受容され、かつ展開されたのであろうか。次節では、これまでの検討を踏まえつつ本稿の議論の射程をゾンバルトへと拡大し、彼における信用理論の内容を分析していきたい。

Ⅳ．ゾンバルトにおける「動態的信用理論」の受容と展開

ゾンバルトが彼の信用理論について体系的な考察を展開することになるのは、「盛期資本主義経済」の分析に研究の焦点を定めた大著『近代資本主義』第3巻においてであった。その第2編第1部「資本」に属する2つの章、すなわち第14章「信用とその発展」および第15章「資本主義経済に対する信用の意義」で、ゾンバルトは、マクラウドからシュンペーターを経てハーンへと至る「動態的信用理論」の成果を十分に踏まえつつ、「盛期資本主義経済」の展開にとって「信用」がいかなる役割を果たしているのかという問いに対して彼なりの回答を与えようと模索するのである。

ゾンバルトによれば、「信用」とは、形式的には「貨幣所有のない購買力」であり、与信および受信という行為は、「将来の反対給付の約束に対して購買力を供与（受領）すること」として定義される。信用業務ないし信用取引の意味で用いられる「信用」とは、「ある給付が即座に反対給付を伴わずに、ただ将来における反対給付を約束する取引」のことに他ならず、このような視角からゾンバルトは「信用の本質」について次のように論じている。

⁵³ Hahn (1930, 138 : 訳256)

⁵⁴ Hahn (1930, 5, 132 : 訳36, 246); Schumpeter (1912, 255; 1926, 189 : 訳332)

給付と反対給付との時間的分離という客観的要素と、期待という主観的要素、——すなわち、将来において反対給付が実現されることに対する信頼 *Vertrauen*——とが結合されていることは、……信用の本質に属することであると私は考える。この信頼は、債務者の人格的な確かさに対する信頼である必要はなく、……客観的關係にもとづくものである⁵⁵。

こうして、ゾンバルトは、マクラウドやシュンペーター、あるいはハーンと同じく「将来における反対給付の約束」とそれが実現されることに対する「信頼」のうちに「信用」(=「購買力」)が供与される根拠を見出そうとするのであるが、ともあれ、ここでは特にゾンバルトがこの「信頼」の拠りどころを債務者ないし受信者の「人格的な確かさ」に求めているのではなく、かかる人的結びつきを超越した「客観的關係」にもとづくものとして捉えている点に注目しておこう。ゾンバルトの認識では、「盛期資本主義時代」における債権・債務関係は、もはや個々の人格性を媒介して成立するものではあり得ず、その関係は「脱人格化 *Entpersönlichung*」(=「物象化 *Versachlichung*」)されたものとして把握されなければならないのである。

以上のように自らの基本的な信用観を整理したゾンバルトは、次に「信用の種類」を個人的消費のために供与される「消費的信用 *Konsumtivkredit*」と事業目的のために供与される「生産的信用 *Produktivkredit*」とに区別し、後者のみを研究対象に据えることを明言したうえで、この「生産的信用」をさらに「流通信用 *Zirkulationskredit*」と「生産信用 *Produktionskredit*」という2つの種類に区別している⁵⁶。彼によれば、「流通信用」とは、「単に資本の構成部分を別の形態の資本に転化させること」、つまり「既存の商品を移転させること」を目的として供与されるに過ぎないのに対して、「生産信用」とは、「企業の有する資本額を拡大・増加させること」、換言すれば「新しい生産物を作り出すこと」を目的として供与される。ゾンバルトは、「資本主義の発展に対する銀行の重要性」が、歴史的には「生産信用を供与しはじめるとともに、その程度に応じて増大していった」と指摘しているが⁵⁷、このような彼の認識は、実はこれよりほぼ4半世紀前の1903年に公開された『19世紀のドイツ国民経済』でもすでにはっきりと強調されていたことであった。すなわち、その浩瀚な著作の第9章「銀行と取引所」のなかで、ゾンバルトは、ドイツにおける現今の銀行の金融活動が「流通信用を与えることにけっして限定されてはならず、その主要な課題の一つは、まさしく生産信用の供与にこそ求められる」と力説したうえで、次のように述べていたのである。

私が生産信用と呼ぶのは、企業家の自由裁量に委ねられた価値総額 *Wertbetrag* を拡大する信用、したがって資本を価値増殖する信用のことである。そのような信用を供与する銀行、した

⁵⁵ Sombart (1927, 175 : 訳291-292)

⁵⁶ Sombart (1927, 175-176 : 訳292)

⁵⁷ Sombart (1927, 198 : 訳328)

がって直接的あるいは間接的に資本主義的企業の創設ないし拡大に関与する銀行は、……生産信用銀行と呼ばれなければならないであろう⁵⁸。

上記の引用文からまず確認されるのは、ゾンバルトがここでも「銀行」が供与する「生産信用」を「資本を価値増殖するための信用」として捉えているということである。『近代資本主義』（初版、1902年）を上梓して以来、ゾンバルトは一貫して「資本主義およびその独自の経済形態である資本主義的企業の目的」が、何よりも「資本の価値増殖」（＝「利潤の再生産」）を実現させることにありと主張し続けているのであるが⁵⁹、かかる目的の実現のためには、「生産信用」の供与が不可欠であるとゾンバルトはいうのである。このような意味で、彼はこの「生産信用」のことを「拡張信用 Erweiterungskredit」または「拡大信用 Ausdehnungskredit」とも言い換えているのであった⁶⁰。

さて、それでは、ゾンバルトはこうした信用資金の「源泉」の問題については、いかに考えているのであろうか。彼によれば、「信用」を源泉別に分けるとすると、社会的所得あるいは既存の資本をある者から他の者へと譲渡する「委譲信用 Übertragungskredit」と信用資金を「無」から創造する「指図信用 Anweisungskredit」という2つの場合が想定される⁶¹。ここでゾンバルトが「指図信用」（＝「信用創造」）という場合には、それはただ単に個々の与信者や受信者の資産を越える額の購買力が供与されることを意味するのではなく、いわゆる「社会の資産 Aktiva der Gesellschaft」、すなわち社会全体における従来の生産力（＝「これまでに費やされた労働量のうちに現れている一定の程度の作業能率」）を超える額の購買力が供与されることを意味している⁶²。ゾンバルトの認識では、「委譲信用」が、単にある者から他の者へと資本財を移転させるに過ぎず、これによって基本的には生産の「方向」が変化するだけでその「規模」が拡大することはほとんど期待され得ないのに対して、「指図信用」の場合には、既存の労働力のストックを超える額の購買力、つまり「追加労働によってのみ充足され得る」購買力が供与されることとなり、それゆえこれ

⁵⁸ Sombart (1903, 215)

⁵⁹ Sombart (1902, 196; [1916] 1987, 321 : 訳468; 1925, 4; 1931, 258) なお、初期ゾンバルトの代表作である『近代資本主義』（初版）の議論構成については、田村（1996; 1997; 1998）、Takebayashi (2003) を参照。

⁶⁰ Sombart (1927, 176 : 訳293) これに対して、ゾンバルトは「流信用」のことを「促進信用 Beschleunigungskredit」または「清算信用 Liquidationskredit」とも呼ぶことができると述べている。

⁶¹ Sombart (1927, 177 : 訳294)

⁶² Sombart (1927, 178 : 訳296) ゾンバルトは、真の「信用創造」とは、このように「社会の資産」を超えて信用の供与がなされた場合のことを指すのであって、単に個々の与信者ないし受信者の資産を越えて貸し出されたからといって、それをもって信用が「無から創造された」とみなすシュンペーターやハーソンの見解は適当とはいえないと批判している（Sombart 1927, 179 : 訳297）。ちなみにシュンペーターは、『近代資本主義』第3巻に対する書評論文で、「彼 [= ゾンバルト] が『信用創造』を扱うその手法にかんしては、危険なしとはしない」としながらも、ゾンバルトによる「信用」の種類別の区分や概念構成それ自体は、「素晴らしい、かつ壮大な〔信用にかんする〕概観を提供してくれるものである」と述べており、全体としてゾンバルトの信用観にポジティブな評価を与えている（Schumpeter 1927, 368）。

は将来的な資本の増加および生産力の拡充に多大な貢献を果たすものとして理解されている⁶³。

こうして、ゾンバルトは資本を価値増殖させることを目的とする「生産信用」の系譜に「指図信用」(=「信用創造」)を位置づけたうえで、「資本主義経済の拡張」に対してそれが果たす役割を高く評価している。とはいえ、もちろんゾンバルトが動態的な「経済発展」を実現させるための「原動力」として規定しているのは、あくまで「指導的経済主体」としての「資本主義的企業家」に他ならないという基本的な事実を看過することは許されない⁶⁴。企業家の遂行する「革新」が「経済発展」のための独立変数であり、信用創造による資金調達はその革新活動に依存する従属変数であるという先にシュンペーターで確認した構図は、ゾンバルトの経済学体系でもほぼそのまま妥当しているといつてよい。しかしながら、その一方でゾンバルトは、たとえ優れた資質を備えた企業家であっても潤沢な資金に恵まれていなければその革新的才能を十全に発揮することはできないと確信しており、それゆえ持続的な企業家活動を保証するための「信用」(=「生産信用」)とそれを供与する「信用組織」(=「銀行」)の存在は、彼にあっては「経済発展」のための必須の条件であると見なされたのであった。ゾンバルトは次のようにいう。

かつては、——つまり初期資本主義時代にあつては——企業家は自身富裕であるか、富裕な人の子であるか、あるいは富裕な人と関係をもっていなければならなかった。だからある者は企業家としての才能をもつていても貨幣がなく、ある者は貨幣はあつても企業家としての才能、あるいはその意志をもたない、という事態がしばしば起こらざるを得なかった。今日〔=「盛期資本主義時代」〕では、富裕な者は自ら企業家にならなくとも、その貨幣を容易に資本として用いることができる。また、資力のない者もいっそう容易に貨幣を手にすることができる。資力のない企業家に彼の必要とする資本を供給する方法は、……いうまでもなく株式会社と信用組織である。とりわけ、信用組織こそは、資力の乏しい者にも企業家活動を営むことを可能にするものである⁶⁵。

このように、ゾンバルトは「無資産者を企業家活動にまで引き上げたこと」、換言すれば「企業家活動の実践が貨幣所有に結びつけられていた初期〔資本主義〕時代の偶発性が除去された」という点に「信用」ないし「信用組織」である「銀行」(あるいは「株式会社」)の意義を認めている。

⁶³ Sombart (1927, 178 : 訳296)

⁶⁴ 詳しくは、筆者による一連の研究成果(奥山 2005; 2006; Okuyama 2007)を参照されたい。ゾンバルトの企業家観については、Sombart (1902, 197-199; 1909; [1913] 1920, 69-76; 212-240; 256-259 : 訳80-87; 222-248; 265-267; [1916] 1987, 322-324 : 訳470-472; 1925, 15-21; 1927, 3-41 : 訳23-77)を見よ。なお、ゾンバルトの企業家観の基本的特徴がシュンペーターの革新的企業家像に対して少なからぬ影響を及ぼしていたという事実を初めて明瞭に指摘したのは、レンガー (Lenger 1994, 234) である。ゾンバルトとシュンペーターの経済学体系の本格的な比較検討の作業は、別の機会に譲りたい。

⁶⁵ Sombart (1927, 20-21 : 訳46-47)

つまり、「銀行」とは個人的な出自や人格に関係なく、最もすぐれた経営手腕を発揮する者（＝「資本主義の意味における最も有能な人物」）であれば誰であらうと継続的に「資本」（＝「購買力」）を提供しようとするのであり、この意味で、ゾンバルトにとって、「銀行」は「株式会社」とならんで「天才のための足場 Stütze für das Genie」として称されるのに相応しい機関であった⁶⁶。

ところで、ゾンバルトが「銀行原理」のことを「集合的貸付基金 kollektiver Leihfond を利用する信用供与の原理」⁶⁷と定義していることからわかるように、通常、銀行はできるだけ多くの人々からその貯蓄額を自己に貸し付けさせて一つのまとまった基金を造り出し、これを基礎として企業家に対して信用の供与を行う。しかしながら、ゾンバルトによれば、「盛期資本主義時代」における銀行は、このように受信業務に依存した形で与信業務を行うことはほとんどない。というのも、この時代の銀行は、「実質的支払手段」である現金を用いることなく、単なる「記帳 Buchung」、要するに「支払われるべき金額を当該目的のために設定された口座の借方あるいは貸方に記入すること」⁶⁸（＝「口座振替」）を通じて信用の供与を行うのが一般的だからである。すなわち、「盛期資本主義時代」では、「あらゆる大規模な銀行経営において、銀行原理は現金のない支払いの原理と結びつけられている」⁶⁹のであり、これによって「信用」は貨幣ないし金保有の制限から解放され、「生産信用」、ことにその一形態である「指図信用」が著しく発展することとなったのである。

以上のような、現金を必要としない銀行の与信業務を重視するゾンバルトの見解には、いうまでもなく前節で検討したシュンペーターの信用創造理論、あるいはとりわけハーソンの「無現金経済論」からの影響がはっきりと投影されている⁷⁰。同時代に隆盛を極めていたこれらの「動態的信用理論」からゾンバルトがいかに多くの示唆を与えられていたかということは、この一点をもってしても否定し得ないといえるであろう。しかしながら「生産信用」（＝「指図信用」）が「資本主義経済の拡張」を導く原因について論じたゾンバルトの以下の主張は、彼が「動態的信用理論」から決定的な影響を受けていたという事実を裏づけるうえで、よりいっそう有力な証左となるものである。ゾンバルトは次のようにいう。

信用は、——わけでも生産信用の形態において——企業家に対して生産の拡大および生産方法の改良を強制することにより、これ〔＝「資本主義経済の拡張」〕を促すものである。というのも、生産信用とは、いうまでもなく将来において生産が増加される場合にのみ、その正当性を有するものだからである。生産信用は、将来において余剰生産 Mehrproduktion の行われるだけ、それだけの分量しか常に供与され得ない。というのも、借り入れられた金額は、余剰生産

⁶⁶ Sombart (1927, 220 : 訳369) なお、ゾンバルトの「株式会社」論については別途検討を予定している。

⁶⁷ Sombart (1927, 183 : 訳304)

⁶⁸ Sombart (1927, 187 : 訳310)

⁶⁹ Sombart (1927, 188 : 訳312)

⁷⁰ シュンペーターおよびハーソンの「動態的信用理論」（＝「新しき信用理論」）のゾンバルトへの影響については、同時代にすでに難波田（1933, 327）が指摘している。

をもって初めて返済可能となるからである。信用によって購買する生産者は、(その信用が生産信用である場合には) 将来の生産によって果たされる約束でもって支払いを行うのである。それは、個々の企業家にとっては通常のことであり、これによって彼らのうちに拡張欲 *Ausdehnungsdrang* が植えつけられ、さらにそれは拡張強制 *Ausdehnungszwang* へと変化していくのである。その信用が真の指図信用である場合には、すなわち、われわれの用語にしたがえば社会の資産を超過する信用である場合には、こうした個々の企業家が引き起こす生産の拡大は、同時にまたあらゆる経済的生産の増加を意味するものであり、そしてそれはあらゆる経済的生産力の上昇にもとづくものである⁷¹。

上記の引用文から明らかなように、ゾンバルトにとって「生産信用」の供与は、何よりも「将来における余剰生産」を実現させることによって正当化されている。というのも、企業家が銀行からの「生産信用」をさしあたり無担保で受領し得るのは、彼がそれを用いて近い将来「余剰生産」を達成し、その収益の一部を負債の返済に充てるという企業家と銀行双方に合意された「約束」が存在しているからなのである。こうして、企業家は「生産信用」、ことに「指図信用」を通じて、将来的な収益を得ようとする「拡張欲」を促進され、結果としてこのことが国民経済全体における生産力の向上をもたらす一因になるとゾンバルトはいうのであるが、こうした彼の論理には、明らかにマクラウドによって確立された近代的信用観の強い影響が垣間見えよう。というのも、ゾンバルトは、「信用」の真の機能が「将来収益の現在価値を交易のなかに導入すること」にあると捉えたマクラウドの見解に基本的に同意しており⁷²、まさしくこの点に信用が「無」から「創造」される原因を見出そうとしているからである。ゾンバルトにとっては、こうした銀行による「指図信用」、つまりは信用創造にもとづく「資本」の調達(=「購買力」の供与)こそが「経済発展」の根幹である企業家の革新的才能を最大限に引きだす重要な推進力の一つとして見なされているのであった。

以上のようなゾンバルトの見解が、信用創造による企業家への資本=購買力の供与を「経済発展」のための最重要なファクターとして捉えたシュンペーターやハーンの立場と著しく符合するものであることは、ほとんど疑う余地のない事実といってよいであろう。かくして、ゾンバルトもまたマクラウドによって提唱され、シュンペーターを経てハーンへと受け継がれた「動態的信用理論」の正統なる継承者の一人であったといい得るのである。

V. おわりに

本稿では、ゾンバルトの信用理論が多分に彼以前もしくは彼と同時代の「動態的信用理論」から

⁷¹ Sombart (1927, 220–221 : 訳370)

⁷² Macleod (1889, 1ed., I, 80); Sombart (1927, 221 : 訳370)

の強い影響のもとで構築されたものであることを明らかにした。本論でも述べたように、ゾンバルトは『19世紀のドイツ国民経済』（1903年）ですでに企業家の営利活動に対する銀行による信用供与のもつ意義を説いてはいたが、しかし彼がとりわけ「信用創造」（＝「指図信用」）の「経済発展」に及ぼす重要性を認識し、それをことさら強調するようになったのは、マクラウド、さらにはシュンペーターやハーンの信用論研究の成果を受容したことにその原因があったと考えられる。そうした受容・継承関係の具体的な内容、要するに双方の信用理論における内的な関連性がいかなるものであったのかについては、すでに前節で検討すみのことであろう。その要点を今一度摘記するならば、こうである。すなわちゾンバルトは、「信用」を「将来収益に対する現在の権利」と解したマクラウドや「新しく創造される購買力の可能量」が「将来の財貨」に依存すると捉えたシュンペーターの論理に与しつつ、ここに銀行が現金の保有量による制約を受けない能動的な与信業務を遂行する根拠、つまり「銀行原理」と「現金のない支払いの原理」とが結合する根拠があると主張する。これは、間違いなくハーンの「無現金経済論」も念頭に置いたうえで提示された見解であったといえるが、ゾンバルトがこのように「動態的信用理論」を積極的に受容した背景には、明らかに一貫して企業家ないし彼による革新的行動を経済発展の最も重要な「原動力」と見なしていたゾンバルト自身の資本主義把握があったと考えられる。すなわちゾンバルトは、「盛期資本主義経済」における企業家の営利活動には「信用創造」にもとづく莫大な資本供与が不可欠であることを認める一方で、そうして企業家に供与された「信用」（＝「資本」）は、企業家の「革新」を通じて必ずや銀行に対する負債を償却してもなお余りある「余剰生産」を実現させることになることを確信していたのであった。マクラウドを起点とし、同時代にシュンペーターやハーンによって代表されていた「動態的信用理論」とは、このような意味でゾンバルトが彼の資本主義観に照らしてほとんど違和感なく受容することのできる内容を備えた理論であったのである。

参考文献

- Appel, M. 1992. *Werner Sombart: Historiker und Theoretiker des modernen Kapitalismus*. Marburg: Metropolis.
- Backhaus, J. [Ed.] 1996. *Werner Sombart (1863–1941)——Social Scientist*. 1: *His life and work*; 2: *His theoretical approach reconsidered*; 3: *Then and now*. Marburg: Metropolis.
- 2000. *Werner Sombart (1863–1941) Klassiker der Sozialwissenschaften*. Marburg: Metropolis.
- Ellis, H. S. 1934. *German Monetary Theory 1905–1933*. Cambridge, Massachusetts: Harvard University Press.
- Haberler, G. 1927. Albert Hahns „Volkswirtschaftliche Theorie des Bankkredits“. *Archiv für Sozialwissenschaft und Sozialpolitik*. 57 (3): 803–819.
- Hahn, L. A. 1920. *Volkswirtschaftliche Theorie des Bankkredits*. 1. Aufl. Tübingen: J. C. B. Mohr.
- 1923. Kredit. In *Handwörterbuch der Staatswissenschaften*. 4. Aufl. Bd. 5. Jena: Gustav Fischer.
- 1930. *Volkswirtschaftliche Theorie des Bankkredits*. 3. Aufl. Tübingen: J. C. B. Mohr. 大北文次郎訳『銀行信用の国民経済的理論』実業之日本社, 1943.
- 1963. *Fünfzig Jahre zwischen Inflation und Deflation*. Tübingen: J. C. B. Mohr.
- Hinze, O. 1929. Der moderne Kapitalismus als historisches Individuum. Ein kritischer Bericht über Sombarts Werk. *Historische Zeitschrift*. 139: 457–509.
- Lenger, F. 1994. *Werner Sombart 1863–1941: Eine Biographie*. München: C. H. Beck.

- Macleod, H. D. 1889-1891. *The Theory of Credit*. 1ed. 2vols. London: Longmans Green and Co.
- 1893-1897. *The Theory of Credit*. 2ed. 2vols. London: Longmans Green and Co.
- Okuyama, M. 2007. Die Auffassung des kapitalistischen Unternehmers von Werner Sombart und seine Kredittheorie. *Journal of Economics. Meiji University Graduate School*. 27: 1-18.
- Schumpeter, J. A. 1908. *Das Wesen und der Hauptinhalt der theoretischen Nationalökonomie*. Leipzig: Duncker und Humblot. 大野忠男他訳『理論経済学の本質と主要内容』岩波文庫, 1983.
- 1910. Über das Wesen der Wirtschaftskrisen. *Zeitschrift für Volkswirtschaft, Sozialpolitik und Verwaltung*. 19: 271-325.
- 1912. *Theorie der wirtschaftlichen Entwicklung*. 1. Aufl. Leipzig: Duncker und Humblot.
- 1926. *Theorie der wirtschaftlichen Entwicklung. Eine Untersuchung über Unternehmergewinn, Kapital, Kredit, Zins und den Konjunkturzyklus*, München und Leipzig: Duncker und Humblot. 塩野谷祐一他訳『経済発展の理論』(上)(下) 岩波文庫, 1977.
- 1927. Sombarts Dritter Band. *Schmollers Jahrbuch für Gesetzgebung, Verwaltung und Volkswirtschaft im Deutschen Reich* 51: 349-369.
- 1928. Unternehmer. In *Handwörterbuch der Staatswissenschaften*. 4. Aufl. Bd. 8. Jena: Gustav Fischer.
- 1954. *History of Economic Analysis*. New York: Oxford University Press. 東畑精一訳『経済分析の歴史』全7冊, 岩波書店, 1955-62.
- Sombart, W. 1902. *Der moderne Kapitalismus*. 1. Aufl. Bd. 1. Leipzig: Duncker und Humblot.
- 1903. *Die deutsche Volkswirtschaft im Neunzehnten Jahrhundert*. Berlin: Georg Bondi.
- 1909. Der kapitalistische Unternehmer. *Archiv für Sozialwissenschaft und Sozialpolitik* 29: 689-758.
- [1913] 1920. *Der Bourgeois. Zur Geistesgeschichte des modernen Wirtschaftsmenschen*. München und Leipzig: Duncker und Humblot. 金森誠也訳『ブルジョワ——近代経済人の精神史』中央公論社, 1990.
- [1916] 1987. *Der moderne Kapitalismus*. Bd. 1. *Die vorkapitalistische Wirtschaft*. München: Deutscher Taschenbuch Verlag. 岡崎次郎抄訳『近世資本主義』第1巻, 2冊, 生活社, 1942-1943.
- 1925. Die prinzipielle Eigenart des modernen Kapitalismus. In *Grundriss der Sozialökonomik*. IV. Abteilung: *Spezifische Elemente der modernen kapitalistischen Wirtschaft*, I. Teil. Tübingen: J. C. B. Mohr.
- 1927. *Der moderne Kapitalismus*. Bd. 3. *Das Wirtschaftsleben im Zeitalter des Hochkapitalismus*. München: Duncker und Humblot. 梶山力抄訳『高度資本主義 I』有斐閣, 1940.
- 1931. Kapitalismus. In *Handwörterbuch der Soziologie*. Stuttgart: Ferdinand Enke.
- Takebayashi, S. 2003. *Die Entstehung der Kapitalismustheorie in der Gründungsphase der deutschen Soziologie. Von der historischen Nationalökonomie zur historischen Soziologie Werner Sombarts und Max Webers*. Berlin: Duncker und Humblot.
- Wagner, V. F. 1937. *Geschichte der Kredittheorien. Eine dogmenkritische Darstellung*. Wien: Julius Springer.
- 雨宮昭彦, 2005. 『経済秩序のポリティクス——ドイツ経済政策思想の源流』東京大学出版会.
- 石川淑子・飯田裕康, 2003. 「シュンペーターにおける信用の概念——シュンペーターはなぜ貨幣理論を完成できなかったのか」『帝京経済学研究』37 (1・2): 97-122.
- 伊東光晴・根井雅弘, 1993. 『シュンペーター——孤高の経済学者』岩波新書.
- 大北文次郎, 1943. 「ハーン『銀行信用の国民経済的理論』解説」アルバート・ハーン著 大北文次郎訳『銀行信用の国民経済的理論』所収 実業之日本社.
- 大野忠男, 1971. 『シュンペーター体系研究——資本主義の発展と崩壊』創文社.
- 奥山誠, 2005. 「ヴェルナー・ゾンバルトの企業家論」経済学史学会『経済学史研究』47 (1): 35-48.
- , 2006. 「ゾンバルトにおける資本主義的企業家像の構成と『ユダヤ人的特性』」明治大学『政経論叢』75 (1・2): 225-262.
- 金指基, 1987. 『シュンペーター研究』日本評論社.
- , 1996. 『シュンペーター再考——経済システムと民主主義の新しい展開に向けて』現代書館.
- 木村健康, 1933. 「シュンペーターの貨幣理論」東京大学『経済学論集』3 (3・4): 310-326.

- 塩野谷祐一, 1995.『シュンペーター的思考——総合的社会科学の構想』東洋経済新報社.
- 新庄博, 1937.『金融理論の新傾向』甲文堂書店.
- 田村信一, 1996.「近代資本主義論の生成 (一)——ゾンバルト『近代資本主義』(初版 1902)の意義について」
北星学園大学経済学部『北星論集』33: 1-33.
- , 1997.「近代資本主義論の生成 (二)——ゾンバルト『近代資本主義』(初版 1902)の意義について」
北星学園大学経済学部『北星論集』34: 217-251.
- , 1998.「国民経済から資本主義へ——ロッシェー, シュモラー, ゾンバルト」住谷一彦他編『歴史
学派の世界』所収 日本経済評論社.
- 中谷實, 1938.『新金融理論——預金通貨と中立貨幣』有斐閣.
- 難波田春夫, 1933.「アルベルト・ハーンの信用理論」東京大学『経済学論集』3 (3・4): 327-336.
- 二階堂達郎, 1993.「H. D. マクラウドの信用理論と近代的信用観の形成」『大手前女子大学論集』27: 159-
171.
- 根井雅弘, 2001.『シュンペーター——企業家精神・新結合・創造的破壊とは何か』講談社.
- 野田弘英, 2000.「シュムペーターの発展理論における『信用創造』」『東京経大会誌』215: 3-22.
- 麓健一, 1953.『信用創造理論の研究』東洋経済新報社.
- , 1956.「信用創造論」信用理論研究会『講座 信用理論体系 Ⅲ 学説編』所収 日本評論新社.
- 三上隆三, 1980.「貨幣・信用学説」『経済学大辞典 Ⅲ』所収 東洋経済新報社.
- 三輪悌三, 1949.「信用創造論の批判的考察」『金融経済』2: 1-12.
- , 1951.「シュムペーター経済学の二元性——とくに信用創造論との関連において」『経済評論』
6 (6): 47-55.
- , 1952.「信用創造の二形態——シュムペーター『経済発展の理論』とケインズ『雇傭, 利子及び貨
幣の一般理論』との関連において」『金融経済』12: 16-37.
- , 1963.『貨幣金融論』東洋経済新報社.
- 八木紀一郎, 1988.『オーストリア経済思想史研究——中欧帝国と経済学者』名古屋大学出版会.